View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

二〇一四年度関西学院大学図書館特別展　書誌解題

西鶴と談林俳諧

森田雅也

去る二〇一四年十月十八日（土）から十月二十日（月）に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスH号館において第六十六回俳文学会全国大会が開催（森田雅也大会実行委員長）された。その際、本学大学図書館では、学会会期にあわせ、その前日の十月十七日（金）より、関西学院大学図書館特別展として「西鶴と談林俳諧」の展示が行われたが、本論文はその書誌解題に所見を加えたものである。書誌調査は大学院森田ゼミ（雲岡梓・朴ナリ・辻田徹・三川莉紗・吉田健剛、学部生遠藤真央・後藤京）があたった。

「西鶴と談林俳諧」（展示主旨説明）

西鶴は、あまりに短編小説集『好色一代男』『好色五人女』『日本永代蔵』などが有名なために、一般的には浮世草子作家として知られている向きがある。しかし、ここに展示する『本朝二十不孝』『男色大鑑』『世間胸算用』『本朝桜陰比事』など二十点近い浮世草子作品は、わずかに晩年十数年に作られたもので、その生涯の多くは俳諧師として活躍している。まるで夏目漱石の文人としての活動が晩年の小説家としての人生に集約されて認識されているのと似

ているといえるかも知れない。

西鶴は十代半ば俳諧に志したとされ、二一歳の寛文二年（一六六二）には早くも点者として独立していたようである。当時の俳号は鶴永、のち西山宗因に師事して西鶴と改めた。その新奇で異風な作風は阿蘭陀流と呼ばれ、談林派特有の軽口・狂句の早口の俳諧を得意とし、延宝三年（一六七五）には、妻の死に際して追善の『独吟一日千句』を刊行している。この独吟・速吟の俳諧は矢数俳諧と呼ばれ、延宝八年（一六八〇）には四〇〇〇句の『西鶴大矢数』を大坂生玉社で成就、刊行し、貞享元年（一六八四）六月五日、住吉社にて大矢数二万三五〇〇句独吟の大記録を打ち立てるが、これを己の矢数俳諧の最後とした。

今回の「西鶴と談林俳諧」という展示テーマは、そのような西鶴と談林派の活躍をあげるとともに、はじめ談林派とされながら、後に蕉門などと関わった人々の作品も展示している。西鶴の師、西山宗因は、松永貞徳の貞門派から別れ、大坂、京都、江戸に談林俳諧の活躍の場を求めたが、江戸下向を迎えた一人に松尾芭蕉がいるなど、後に貞門派、談林派、蕉門派と目される人々も、その門流を越えて直接的、間接的に俳諧を通した風交の場を広げていった時代があったことを発信しようとする試みにある。

そこで本展示では、関西学院大学図書館の有した「西鶴と談林俳諧」関係の未公開古典籍を中心に資料を紹介した。1～10は、関西学院大学図書館貴重文庫所蔵本で、いずれも『国書総目録』刊行後に購入したものである。

また、会期中、永井一彰氏（奈良大学文学部教授）の特別のご助力によって、御所蔵の初出『俳諧短冊帖』『西鶴自筆短冊』を公開展示することができた。永井氏は、会期直前にご著書『月並発句合の研究』（笠間書院）によって、平成26年度文部科学大臣賞を受賞された。そのため、記念公演などご多忙の中、展示にご協力いただくこととなり、そのご学恩とご尽力に心より敬意と感謝を記して申し上げたい。

1、初出『西山宗因独吟百韻』一軸。　二二一・〇×一五・六（糎）　巻子。箱入り。

本書は大阪天満宮連歌所宗匠であり、談林俳諧の祖である、西山宗因の独吟百韻である。延宝二（一六七四）年七月一一日成立。宗因七〇歳の作。『西山宗因全集　第二巻　連歌篇二』に収載される『「朝霧や」百韻』の異本。端作・賦物欠。『西山宗因全集』の底本となった綿屋文庫所蔵宗因自筆巻子本『播州明石浦人麿社法楽　賦御何連歌百韻』の他に、月照寺所蔵宗因自筆懐紙『賦御何連歌百韻』が存在した。

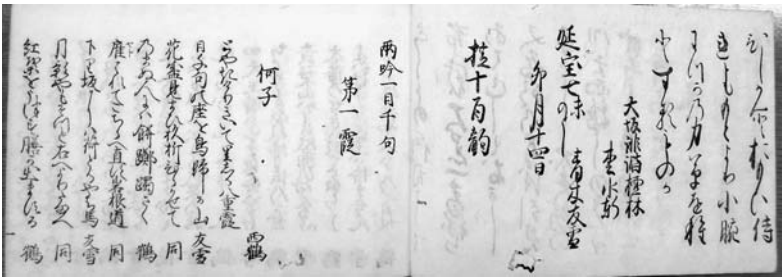
箱裏に「上野本町　沖森蔵」の印が付され、沖森文庫旧蔵であったことがわかる。

2、初出『歌仙大坂俳諧師』一冊。　二八・五×二〇・五（糎）　版本。藍色無地表紙。

井原西鶴編・画の俳諧撰集。当時の大坂の俳諧師三十六人を三十六歌仙絵の要領で左右に分け、それぞれの発句を俳諧師の挿絵と共に書く。本書に集められた俳諧師は西山宗因の門下か、宗因の影響を受けた人々であり、談林俳諧を理解する上で意義深い資料である。

本文・挿絵ともに西鶴の自筆とされ、西鶴の筆跡・画風を知る資料としても重要である。題簽欠。内題なし。刊記はないが、序文に「延宝元年歳次癸巳冬陽月中澣」と記述される。『国書総目録』によると、本書の伝本は、綿屋文庫本・酒竹文庫本・柿衛文庫本（欠本）・藤園堂文庫本が知られている。関学本には藤園堂の蔵書印が付されているため、藤園堂本が流出したものであると考えられる。展覧会後、早稲田大学の中嶋隆氏から島根県立図書館所蔵初撰本、柿衛文庫本との相違を懇切にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。したがって、本書は書誌的には再撰本となるが、挿絵の完成度では高いと判断する。

関西学院大学所蔵『歌仙大坂俳諧師』
「左面「鶴永」は「西鶴」の初期俳号



関西学院大学所蔵『両吟一日千句』

3、初出『両吟一日千句』一冊。　一三・六×二〇・二（糎）　版本。藍色無地表紙。

井原西鶴の門人である青木友雪の編。友雪は『生玉万句』・『大句数』などで西鶴の執筆を務めた「青木友浄」と同一人物とする説もある。

延宝七（一六七九）年四月十四日興行の西鶴と友雪の両吟一日千句に、友雪・西吟・西鶴の追加三つ物を添えたもの。序文によれば、この千句は友雪が一種の立合勝負を西鶴に望んで行われたものである。

題簽欠。内題なし。刊記は「延宝七巳未歳五月吉日　深江屋　太郎兵衛板行」。『国書総目録』によると、本書の伝本は国立国会図書館蔵本しか知られていない。保存状態も良好であり、貴重な資料である。

4、初出『西山宗因自筆　夏の句　行く舟を』短冊。　一幅。一五八・八×三二・三（糎）。軸装。

行舟をみるさへ涼し志賀海　宗因

西山宗因（慶長一〇・一六〇五～天和二・一六八二）は大阪天満宮連歌所宗匠であり、俳諧談林派の祖である。『宗因発句帳』（大阪天満宮蔵）に同一句が収められる。「舟」と「涼し」、「海」などの縁語を多用した古風な　句。

5、初出『俳諧愛宕土産』一巻。　二六・二×二三・三（糎）。　巻子。

池西言水の編になる点取り俳諧集。成立年不明。可信の序あり。言水は芭蕉と同時代の俳人。松江重頼門といわれているが、重頼の選集に名はみえない。二十代後半頃に江戸へ出て、談林派の俳人として活躍した。

序文によると、本書は可信が愛宕神社に参詣した後に都で言水に面会し、評点を求めて成立したものである。連衆は松義・幽吟・可信・正信・岸水・松邪・盃我・宗友・■泉。

岸水は、「水」の字が付くことから言水の弟子と推測される。幽吟は、京都の俳人友琴（宝永三・一七〇六年没）の別称。正信は、言水編『東日記』に名が見える政信と同一人物で、可信は、言水編『江戸弁慶』に名が見える可心と同一人物であろうか。いずれにしても、連衆は言水周辺の俳人たちであろう。

内容は、「独になりてさしも淋しき」、「そろりそろりとそろりそろりと」等の下句に対応する上句の優劣を競うものである。

なお、全文の翻字、注釈は、森田雅也・雲岡梓「『俳諧愛宕土産』の研究」『人文論究』第六十四巻四号に掲載（二〇一五年六月刊行予定。）

6、『独ごと』上下二巻二冊。　一六・二×二二・六（糎）。　版本。黄土色。毘沙門亀甲地に小桜と若松の丸散らし。

上嶋鬼貫が五十八歳の折の俳論書。享保三（一七一八）年刊跋。京都・中西卯兵衛。上巻は鬼貫の俳諧観（俳論）が確認でき、下巻では鬼貫の随筆の魅力が享受できる。鬼貫の生前に記された物であり、鬼貫の生の言葉によって、その俳諧観が聞けるという事は日本文学論史上においてきわめて上質なものである。

上巻では「まこと」が様々な角度より多様に説かれている。下巻は四季の風物、旅、恋、祝等を主題として用いた随筆集であるが、上巻巻末（三九　本意）で述べられている「所詮」論に繋がるものとして執筆されていると思われる。

7、『本朝二十不孝』五巻五冊。　一八・一×二五・六（糎）。　版本。藍色無地表紙。

井原西鶴作の浮世草子。中国の『二十四孝』をもじり、二十編の親不孝話を集めたもの。貞享三（一六八六）年刊。初版本。序文に「貞享二二稔孟陬月　鶴永（印）　松壽（印）」と記される。表紙右下に「供久」の墨書あり。刊記は「貞享三暦　丙寅霜月吉辰　江戸青物町萬谷清兵衛　大坂呉服町八丁目岡田三郎衛門　同平野町三丁目千種五兵衛　板」。

8、『男色大鑑』八巻八冊。　一八・二×二五・七（糎）。　版本。藍色無地表紙。

井原西鶴作の浮世草子。前半は武家社会、後半は歌舞伎若衆に関する男色説話を取り上げ、義理と意気地のからむ男同士の恋愛を描く。

貞享四（一六八七）年刊。初版本。早大本八巻十冊であるが、初版初印本であるかは不明。題簽には「本朝若風俗男色大鑑」と記される。序には「貞享四年竜集丁夘陬月　鶴永（印）　松壽（印）」とあり。

9、『世間胸算用』五巻五冊。　一七・八×二四・六（糎）。　版本。鉄紺色無地表紙。

井原西鶴作の浮世草子。一年の総決算日の大晦日を中心に展開する、中下層階級の町人の経済生活の悲喜劇を描いた短編集。西鶴町人者の傑作と評される。

元禄五（一六九二）年刊。初版本。版元は大坂伊丹屋太郎右衛門。

10、『一目玉鉾』四巻四冊。　一八・二×二六・〇（糎）。　版本。藍色無地表紙。

井原西鶴作の地誌。絵師不詳。元禄二（一六八九）年刊。元表紙ながら出版地・出版者が削除されている。四巻の裏表紙広告に「大坂心斎橋南四丁目　吉文字屋市兵衛」とある。

第一巻が北海道より奥州街道を経て江戸まで。巻二が江戸より東海道を進んで大井川まで。巻三は同じく東海道を金谷から大坂「天満豊崎」まで。巻四は大坂より瀬戸内海を通って長崎・壱岐・対馬に至るまでの当時の城下町・宿駅・遊廓・物産・社寺・名所・古跡・故事・古歌などを記述した絵入り旅行案内地誌である。

北海道より東廻り航路、東北、東海道、大坂、瀬戸内、九州と展開する案内記の順番は謎めいている。『好色一代男』『日本永代蔵』などが西廻り航路中心の舞台があがることと対照的である。そこには、隆盛し始めた江戸中心の文化や東北俳壇への思惑が指摘できる。［森田雅也編著『島国文化と異文化遭遇～海洋世界が育んだ孤立と共生～』拙稿「第一章『一目玉鉾』と海の道～島国文化としての視点から～」関西学院大学出版会　二〇一五年刊」所収より］

11、永井一彰氏ご架蔵『西鶴自筆短冊』三枚。

只の時もよし野は夢の桜哉　　西鶴
たゝの時もよし野は夢の桜哉　　西鶴
鯛は花は見ぬ里も有けふの月　　西鶴

「只の時も」の句は綿屋本『草枕』（片岡旨恕編二巻二冊）の発句として初見。下巻未見のため、この俳書の刊記は不詳ながら、処々の根拠から延宝四年刊行と推定されている。その根拠の一つが、同句が西鶴自撰『誹諧師手鑑』［延

宝四（一六七六）年刊」にも入集のためとされている。西鶴が後年まで好んだ句とされる。

「鯛は花は」の句は西鶴菩提寺誓願寺西鶴墓碑に刻まれている。芭蕉の弟子其角の『句兄弟』には、この句を兄句として、其角「鯛は花は江戸に生れてけふの月」を置いている。判詞には西鶴の「末二年浮世の月を見過たり」という辞世の句を挙げて西鶴を慕うが、其角をして西鶴の代表句といえよう。

12、永井一彰氏ご架蔵『俳諧短冊帖』

本短冊帖には、表裏併せて、百八十七枚百八十七名、江戸初期俳人、貞門、談林、蕉門等、江戸時代の著名な俳人をほとんど網羅した短冊が収められている。

「表面」は「荒木田守武　飛梅やかろくしくも神の春」を筆頭として、「宗鑑」「貞徳」「西翁（西山宗因）」「季吟」「芭蕉」「其角」「嵐雪」「去来」「支考」と続き、「月居」「大江丸」で終わっている。「裏面」は「貞室」「重頼」「正由」「似空」「信海」「徳元」「未得」「露沾」と続き、「秋色」「五明」「みち彦」で終わっている。「西鶴」は裏面二ウ最後に「山桜　薪に安房からけたり」と登場し、「言水」、「由平」、「来山」、「おにつら（鬼貫）」と続いている。今回の展示室内には、短冊帖の配列よろしく西鶴と談林俳諧仲間として風交の深かった「言水」「おにつら（鬼貫）」の作品を並べているように、編纂に明らかな門流意識を認める。もっとも、全体としての本帖の短冊貼りの法則性は不詳である。おそらく、江戸時代前期に流行した「俳諧手鑑」の類いが忠実な短冊模写の域であるのに比して、ここまでの実物の短冊を集め求めた人物は、ただならぬ顕彰の思いを抱いた中興の俳人か、有能な古筆鑑定家であろう。

表面

1オ

1　飛梅やかろ〳〵しくも神の春　いせ山田　守武

2　満まるに出てもなかき春日哉　宗鑑

3　歌いつれ小町おとりや伊勢踊　貞徳

1ウ

4　やとれとは御身いかなるひとしくれ　西翁

5　五てうにて盆に踊のそ〳〵まろやおかしきかしらつき　季吟

6　京に居て京なつかしきほと、きす　はせを

2オ

7　はつ雪や門に橋ある夕まくれ　其角

8　簾に入て美人に馴るゝ乙鳥哉　嵐雪

9　柿主や梢はちかきあらし山　去来

10　水仙や門を出れは江の月夜　支考

2ウ

11　鶯に障子ひとへの目かね哉　浪花

12　ふゆの日をひそかにもれた枇杷の花　曲翠

13　金の間の庭一杯や八重桜　李由

14　はものや源助亭にて あしもとに春はおちゝる若楓　野坡

3オ

15　松にちり又吹れ行花の果　杉風

16　筏士か寝てなかるゝや芦の花　凉菟

17　七月や地獄の釜も秋の風　許六

18　海のものやまのものともしれぬ月　木節

3ウ

19　こからしや戸をぬけてくる有明し　昌房

20　蛍よりわきのひかりや雨あかり　路健

21　梅ほしのはなとておしむ小僧かな　為有

22　蟹の泡吹て入日のさくらかな　臥高

4オ

23 厳島 硝子の国や若葉のいつくしま　露川

24 此心つねにあらはやけふのつき　ち月（智月）

25 焼落葉色〳〵の木の煙哉　依々

26 すみよしを忘れて居るかほとゝきす　諷竹

4ウ

27 落付ぬ空也宵のほとゝきす　舎羅

28 蟻塚のほめき吹とる秋の風　野童

29 くへ岸の根をさゝけたる柳哉　利合

30 穂はかれて野をはきまはるすゝきかな　反朱

5オ

31 神鳴に露降わたす山辺かな　如行

32 蜂の羽のつよりて暑し蓮の花　毛絖

33 紋日也家〳〵の楊貴妃窓の月　惟中

34 数盃温酎雪中春 雪の日の李白は春のこゝろ哉　その女（園女）

5ウ

35 頃や曇れは雪のこと、降　猿雖

36 しら浜や何を木陰にほとゝきす　曾良

37 音羽眺望 滝の月朧はとりて落にけり　轍士

38 名月に青みのすはるはたけ哉　林紅

6オ

39 菜種殻たくや野風のほと〳〵きす　丈草

40 唯一騎むかふのわけの強さ哉　此筋

41 残の字にひるまぬ色や今朝の菊　千川

42 名月や猿もいさかへみねの松　文鳥

6ウ

43 またひとりものあり何そ梅の花　惟然

44 残る日の所かえせぬ夕立哉　我黒

45 荻の風荻の戦きはもう暮る　雪芝

46 はたらいた梅のつほみや小六月　嵐青

7オ

47 年とりや今朝麗居士か百の銭　洒堂　利牛
48 鵜のつらに篝こぼれて哀也　荷兮　左次
49 ほとゝきすあてた明石もすらしけり　卯七　鼠弾
50 花見よと手形はかゝしお乳人　宇鹿　乙由

7ウ

51 秋の始治天子を尋て ひとひ夜にいるまて昔物語して　路通　探志
52 川こして帯ときによる柳哉　岱水　野径
53 そく才な朝のけしきや九月尽　三州桃先　角上
54 一世帯取散したる花野かな　三河桃後　怒風

8オ

55 盃はくろきにかえて紅葉狩　百里　清川
56 歳旦 うつゝにもいち富士見はや日のはしめ　素龍　百川
57 かも瓜やかの佐殿の草まくら　武仙　雲裡
58 何風の染て通るや唐からし　十丈　六々庵

8ウ

59 郭公啼〳〵風か雨に成ル　洒堂　利牛
60 それをうれ茄子の蓋の萩の華　荷兮　左次
61 松原の水に首出すのきくかな　卯七　鼠弾
62 年内立春 としのうちにしろの先手や梅のはな　宇鹿　乙由

9オ

63 蜻蛉の仮の住ゐやうしの角　路通　探志
64 馬柄杓を岩に割込む清水哉　岱水　野径
65 夕皃や賤か湯殿は石瓦　三州桃先　角上
66 しら露や青田を分て神まいり　三河桃後　怒風

9ウ

67 湖辺に居て都をおもふ　清川
68 大竹の空閑〳〵と夜寒哉　百川
69 夏来ぬとはたかにしたる茶木哉　雲裡
70 鶯の寒さをすゝる初音かな　六々庵

10オ

71 柴あけて寝て流るゝやしめの花　半時庵
72 さみたれや我宿なからかゝりふね　竿秋
73 久堅を己か木陰や藤の花　羅人
74 年抄 本願寺陰陽とわかれてしはすかな　富天

10ウ

75 こほるひの油うかゝふ鼠かな　蕪村
76 ほとゝきす鳴かとまては蜘の糸　几董
77 さみたれやある夜ひそかに松の月　蓼太
78 有明のひま白きかたや池の蓮　完来

11オ

79 うくひすの巣にくせものや朧月　麦水
80 つく〳〵と見てをれはちるさくらかな　士朗
81 関もりの鼻の赤さよけさの霜　蝶夢
82 白梅に手の裏かへす嵐かな　重厚

11ウ

83 結ひこし萩もあらしのはしらかな　闌更
84 ふる雪にあられましりて夜長なり　蒼虬
85 日くらしのなけはつら〳〵古郷おもふ　暁台
86 むめかゝにおとろく梅の散日かな　樗良

12オ

87 植木屋は大きな菊の節句かな　風律
88 梅ちるや湯気立のほる笛の孔　不二
89 はつ雪やみはふりのこす藪柑子　青蘿
90 はつ秋や鶯の子のそらなかめ　成美

12ウ

91 僧をのせて見ゑすなりけり雪の舟　素郷
92 門すゝみ子の寝顔見に戻りけり　午心
93 つゝし　兀山に日の燃落るつゝしかな　月居
94 をし鳥よひと夜別て恋をしれ　大江丸

裏面

1ウ

95 端午 ひくとけふ酢けはあらしな菖蒲酒　貞室

96 餞別に 鶯の音も根にしたり柳哉　重頼

97 秋風にしら河を出たかけふの春　正由

98 花 手にいれて匂ひくはるや花の風　似空

2オ

99 雲峯 公儀ものしや土気はなれた雲の峯　信海

100 ちりしくや庭は絵莚花席　徳元

101 老をかみてはくきを祝ふわかなかな　未得

102 此花さく去年の蜜柑を山路哉　露沾

2ウ

103 秋の田を雁の羽先や鎌のなり　玖也

104 蚊もたへや扇をとれは雪の袖　湖春

105 留主のよし申をきけり庭の雪　正立

106 山桜薪に安房からけたり　西鶴

3オ

107 蛇のすしや下に馴たる沖の石　言水

108 ふりつもる雪や水の音松の声　由平

109 聞にあやし無常のつかひ鰒売　来山

110 夕霧の塚にて この塚は柳なくてもあはれ也　おにつら（鬼貫）

3ウ

111 大かたは月をもめてし七十二　任口

112 古家やつくねぬさきに雪こかし　梅盛

113 仙鶴　葛の葉のおもては近江比叡の雪　仙鶴

114 夜もすからあた口たゝく水鶏哉　立圃

4オ

115 痩牛やはみ草悔む霜の原　青流

116 入月のさはるか動くむら薄　法橋不角
117 菊皿にあまるや露のもりこほし　玄札
118 若ゑひすたいや老せぬ薬り魚　一雪

4ウ

119 浅茅生の灯ゆり込碪かな　立志
120 十月の十も竪横しくれかな　調和
121 大坂宗匠達の催されしに
名物の茂りけふこそみつの誹諧原みち風（三千風）
122 羽子板や遍昭かつきしうそなりけり　信徳

5オ

123 杉伊吹木鵯鵑ともいふへし　一晶
124 ほそひきや久米のわひ人土用干　自悦
125 慈父の別御歎きのほとをしはかりまいらせて
重恩の須彌やかたみの袖の月　似船
126 みそきせしみたらし河や坊主落　高政

5ウ

127 遠方人なを面白しまつはやし　露言
128 歳旦
をそれなからよふてもよかれ君か春　可全
129 余花の散はをそかれとかな時鳥　元隣
130 黄鳥の百囀りや百人首　弘永

6オ

131 三笠山出し月かもなら団扇　可頼
132 心先空になりたる月見哉　正友
133 露にうつる月や千種のうすめ金　きくに
134 たなはたや盥にかけをみつかゝみ　行風

6ウ

135 浦嶋か箱にそ有ける安扇　元順
136 西楼にむす饅頭か落る月　きくう
137 発句こそ花のひとへにさく斗　成之
138 酔さめや河風さむみ千鳥あし　立似

7オ

139 老のはじめに
若水のあはゝや昔老の春　道寸

140 花皿の恵比須拙し女の手　ステ（田ステ）

141 声せても渡り物也鳥緞子　尚政

142 水を酒にくるゝもしらぬ花見哉　一得

7ウ

143 元旦
須弥白し麓の朝日けふの春　随流

144 花給と泣子をすかせ姥さくら　兼豊

145 九重にとへ咲花の種もかな　嘉隆

146 松梅や神の右の手左の手　友貞

8オ

147 あらそはぬ気に弓ひくやことし竹　柳几

148 時しらぬ山や冬見るしら扇　貞恕

149 蛍むなし又とこ闇の蚊屋世界　友雪

150 三光寺ト云寺にて
耀や月雪仏三光寺　蒲剣

8ウ

151 この花のなかめやあかぬ雪布袋　喜雲

152 露なかす硯の海や自然石　梵益

153 けし炭や水のしからみわく火鉢　以仙

154 灌仏は衆生をすくふしやくし哉　不存

9オ

155 咲花のにほひの玉か今朝の露　方救

156 くつろこや野辺の紐とくはなれうし　良保

157 引かへれしやくはあめ牛お七夕　意朔

158 便宜せよまた文も見ぬ天つ鴈　玄康

9ウ

159 瓢箪や花になれこし酒の友　可玖

160 試筆こそ毛をはおしまぬとらのとし　春倫

161 白壁や空にしられぬ雪の宿　空存
162 五月雨にひるや塩焼か袖と喉　野也

10オ

163 雲間もる月は寸善尺魔哉　幸和
164 水間寺のはつむまは銭をかすも哉　保友
165 鹿をさして山馬といふ皮屋哉　器音
166 菊つくり起まとはせる酒気哉　長治

10ウ

167 桜貝は散ても水のあはひ哉　流水
168 はねちらす篠はこ雪の竹馬哉　如貞
169 空にしらぬ木のつら雪や桜花　胤久
170 色かへぬ松や時雨のあまし物　加友

11オ

171 帷子も芭蕉は破れて残けり　重勝
172 鎖おろすたからの奥の桜かな　才麿

173 天の河や夫婦と現し高砂丸　不卜
174 色かへぬ松や和田殿ちゝふとの　露堂

11ウ

175 あし跡はたかさきに見て初桜　千代
176 花やおしきくれぬあるしは朱碗坊　夕翁
177 こちらむけ団扇のつなよ此くるま　盧元坊
178 うへむかは花も咲ふに柳哉　諸九

12オ

179 墨染の人暮やすし子規　司鱸
180 おもてむきはみなしる人ぞ門の松　西順
181 文字みれはしりを頭の蛍かな　正式
182 冬かれや硯の水のあさみとり　松意

12ウ

183 大ふくや一哺は幾千里　貞因

184　追福　世の人の袂ににこす清水哉　宗阿
185　綿をうつ賤は小春や弓■　好与
186　袖垣も月あるころや萩の花　秋色
187　夜は水しつみて雪の入江哉　五明
188　色かへぬ硯あらふて月とらむ　みち彦

本展示ならびに調査は文部科学省科学研究費助成事業から、基盤研究（C）「地方談林俳諧文化圏の発展と消長～西鶴の諸国話的方法との関係から～」（平成二十四年度～平成二十八年度・課題番号：２４５２０２５２）として助成を受けている。

（もりた　まさや・関西学院大学文学部教授）